

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

鹿児島県指宿市

○学校名

指宿市立柳田小学校

○学校のURL

<http://www5.synapse.ne.jp/yanagita-e/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】1・2年各3学級, 3年生以上各2学級, 【特別支援学級】2学級,
【合計】16学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】392人(平成27年11月20日現在)
(内訳: 1年82人, 2年67人, 3年58人, 4年54人, 5年66人, 6年65人)

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績(実施年度及び事業の別)

平成25・26年度人権教育研究指定校事業

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

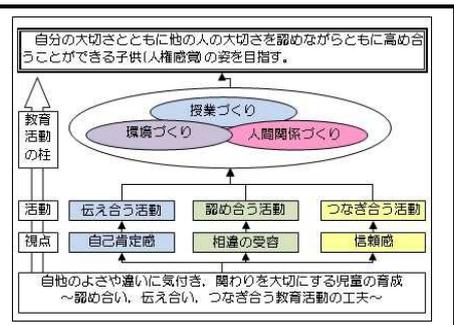
【学校の教育目標】
感性豊かで、共にたくましく生きる子供を育てる
＝元気・覇気・根気＝
【人権教育に関する目標】
一人一人が大切にされ、互いに認め合い、助け合う子供を育てる

○人権教育に係る取組一口メモ

自分の大切さとともに他の人の大切さを認めながら、共に高め合うことができる子供の育成を全教育活動で涵養する。

○人権教育にかかる取組の全体概要

- 言語活動の充実を中心とした、「認め合い、伝え合い、つなぎ合う」授業の在り方の工夫
- 自己評価・相互評価を活用した自己肯定感や他者への信頼感の涵養
- 子供たちの主体的な関わりを目的とした活動の工夫
- 人権感覚を涵養するための校内掲示の工夫



3. 特色ある実践事例の内容

【研究テーマ】

自他のよさや違いに気付き、関わりを大切にする児童の育成
～認め合い、伝え合い、つなぎ合う教育活動の工夫～

(取組のねらい)

- 自分の大切さとともに他の人の大切さを認めながら共に高め合うことができる子供の姿を目指す。

子供たちが将来、様々な経験をする中で人権的な課題に直面したとき、自ら考え、判断し、よりよい行動ができるようにするために、全教育活動を通して、自己肯定感や相違を受容する信頼感、態度を高めながら、子供たちの思考力・判断力・表現力を向上させていく。

(取組を始めたきっかけ)

本校の子供たちは、毎日明るく学校生活を送っている。しかし、自分の思いを表現することが苦手な子供が多く、授業や集会等では一部の子供だけが活躍し、仲間と進んで関わったり、共に高め合ったりしようとする姿が余り見られなかった。そこで、子供たちに自分自身に関することや友達に関する事、学校や家庭に関する事などについての実態調査を行い、子供たちの人権意識に対する実態を把握することにした。

その結果、本校の子供たちは、①自己肯定感が低い②友達に対する信頼感が低い③自分自身の思いを伝えたり、聞いたり、協力したりしながら課題を解決することが苦手であることが分かった。これらのことから、本校の子供たちには、よりよい人間関係を構築させ、仲間と助け合いながらよりよく課題を解決するための方策を身に付けさせることが必要であると考えた。

(取組の内容)

1 取組の概要

	授業づくり		人間関係づくり	環境づくり
認め合う	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価・相互評価(ひまわりノート)の活用 「聞くスキル」の活用 	評価	<ul style="list-style-type: none"> 朝の会、帰りの会を通じた学級経営の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 校内環境(ひまわりロード)の充実 教室環境の整備 学校図書館との連携
伝え合う	<ul style="list-style-type: none"> 「話すスキル」の活用 言語活動を重視した各教科での学び 			
つなぎ合う	<ul style="list-style-type: none"> 「協力するスキル」の活用 教師の発問、問い返し板書の工夫 			

本校で考える人権感覚が涵養されたと考える子供の姿は、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認める」ことができた状態である。これを実現するために次ページの図のような構想を立て、研究を進めていくことにした。具体的には、子供たちがふだんから触れる環境を充実させることを土台にして、子供たち同士の間人間関係づくりを中心に置きつつ、教科等での学習の中で人権教育の技能的側面を高めてい

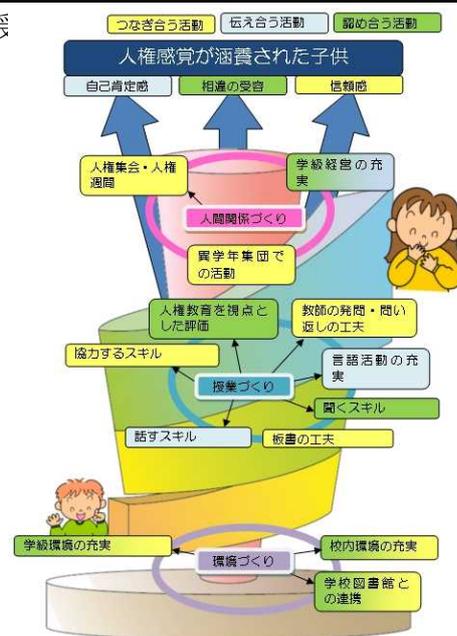
くようにした。「環境づくり」「人間関係づくり」「授くり」「それぞれの柱で「認め合う活動」「伝え合う活動」「つなぎ合う活動」を設定し、どのような手立てや工夫をすれば子供たちの人権感覚が涵養されるかを研究し、それぞれの活動で子供たちの具体的な姿を通して評価していくようにした。

2 取組の実際

(1) 授業づくりでの取組

ア 各教科等における言語活動の目的の設定

各教科等ではどのような目的で言語活動が行われるのかを具体的にまとめた。その例が下の表のとおりである。この表を基にしながら教師は、授業の中で意図的・効果的に言語活動を設定し、子供たちの自己肯定感や相違を受容する態度、信頼感を高めていった。



教科	目的	留意点
国語科	言語活動そのものを効果的に営む力を養うこと。	学習の目的をもち、目的に合った読み取りを行い、自他の考えを高め合う国語科の特質そのものが言語活動の目的であるといえる。 単元を貫く言語活動を設定する。
社会科	子供たちに思考・判断・表現を促し、社会的事象の意味を明らかにすることができること。	自分の考えを作るときに、考えの根拠を明確にして、話し合う場面で自分の考えを十分に生かされるようにすることが大切である。

イ 話す・聞く・協力するスキルの活用

言語活動を充実させ、子供たちの伝え合う力、認め合う力、つなぎ合う力を効果的に育むために、話す・聞く・協力するスキル表を作成した。

これらのスキルについては、国語科や算数科等で学習する語彙や表現、態度を、各学年や学習時期ごとに抜き出し、一覧表にしたものである。

ウ 教師の発問・問い返し・声かけの工夫

		【資料2-2】伝える力・聞く力のスキル				2年	
		4	5	6	7	9	10
伝える力	目標	姿勢や口の形、声の大きさや速さなどに注意					
	態度	姿勢・口の開け方・声の大きさ・速さに理由をほつきりど 決定しながら	理由を説明する 大まか表現に 気をつけながら 予想を立てながら	大事なことを落とさずに 根拠をもちながら たとえを使って		接続詞をつか いながら	至道をはっきりさせながら
話す力	話し方	～だからです。 ～すると、～なる。 もし～だったら。	どうしてかという～から です。 なぜかという～から です。 それは～から です。 ～しそうです。	～からわかります。 ～のような～みたいです。 ～といえます。		それで、だから	
	目標	友達や先生の話を興味をもつ					
聞く力	態度・視点	うなずきながら	友達のよさを認めながら	大事なことを落とさずに 簡単なメモを取りながら	共感できるところを考えながら	詳しく聞きたいことを考えながら	

授業における適切な発問や問い返しは、言語活動において、子供たちの思考や表現を促すために必要不可欠なものである。発問・問い返し例の一覧表は、どの場面でどのような発問や問い返しをすれば子供たちの思考が促され、自分の言葉でよりよく表現できるようになるかを例示したものである。また、本校の人権教育の視点を高めるための声かけや問い返しについても視点ごとに例示し、授業の中で意図的に取り入れるようにした。

人権教育を視点とした声かけ・問い返し例	
自己肯定感を高める	*「でも」「しかし」などの否定的な言葉を使わない。 「どんな考えでも大丈夫です。」 「考えの途中でもいいです。仲間(友達)が続きを話してくれます。」 「〇〇さんが質問してくれたおかげでよい考えが生まれたね。」 「〇〇さんの考えでみんなの考えも広がった(深まった)ね。」 「みんな、〇〇さんの考えに納得できましたね。」 「〇〇さんの考えは、見方を変えたら正しい考えになりませんか。」 「すごい」「なるほど。」「さすが。」「分かりやすい。」「先生はよく分かった。」などの肯定的評価 「納得したところは頷きながら聞きましょう。」 「そうだと思うところはあいつちを打ちながら聞きましょう。」
想起	「どんなことが分かれば解決できそうかな？」 「解決するには何が必要かな？」
概念や推論、解決の見通しを導き出す	「これらの考えをまとめるとどんなことが分かるかな？」 「つまりどういうことかな？」 「答えはほしい、どのくらいになりそうかな？」 「これらの事実(こと)から、どんなことが言えるかな？」 「これらの事実(こと)全体に言えることはどんなことかな？」 「これらの事実(こと)から、どんなことが分かる(分かろう)かな？」

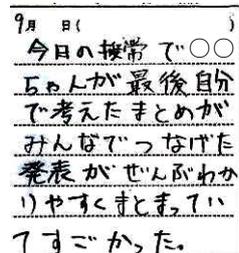
エ 板書の工夫

本校では、板書のはたらきを「分かる板書」「見える板書」「つなぐ板書」の3つに分類し板書の構造化を図ることにした。特に「つなぐ板書」を意識し、子供たちの発表を助け、考えをつながせるための板書づくりを心掛けるようにした。

働き	留意点
(1) 理解を助ける (分かる板書)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習のポイントが分かるような板書にする。 ○ 事実や考えを共有できる板書にする。 ○ 学習を振り返ることができる板書にする。(理解の速さに応じる)
(2) 学習の流れが見える (見える板書)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1単位時間にどんなことが課題になり、どんなことをどのように考え、どのように結論付けたかが分かりやすい板書にする。 ○ 学習内容全体が把握できるような板書にする。
(3) みんなで追究する (つなぐ板書)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一人一人がどのように考えたのか、どのように関連付けられるのかなど、子どもたちが考えを発表する際のプレゼンテーションの道具として板書を活用する。 ○ 子どもたちの考えが比較されたり、関連付けられたりした板書にする。

オ ひまわりノート(自己評価・相互評価)の活用

本校では、自己評価、相互評価を行う際に「ひまわりノート」を活用し、授業の終末に自分の学びを振り返らせ、自分の成長を自覚化させる手立てをとった。ひまわりノートに子供たちが学習の振り返りを行うときの視点として、次の点に留意させながら評価させるようにした。



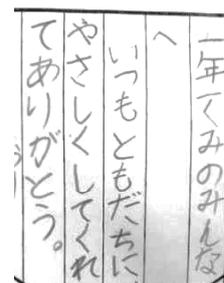
- ① 自分の考えでよかったところ(自己肯定感)
- ② 仲間の考えで自分の考えが変わったり、よくなったりしたところ (相違の受容)
- ③ クラスの考えがつながって新しい考えを作ったところ(信頼感)
- ④ みんなで協力してがんばったこと(信頼感)

(2) 人間関係づくりでの取組

ア 学級経営の充実

よりよい学級経営を行うために、朝の会、帰りの会を活用することにした。

朝の会では教師が一日の目当てに沿った人権の視点に立った行動の仕方や心構えを伝え、子供たちに意識付けさせた。また、「1分間スピーチ」を取り入れ、子供たちが学級全員の



前で発表する場を意図的に設け、自信をもって自分の思いを伝え、「自己肯定感」を高めるための手立てとした。さらに、帰りの会では、「今日のありがとう」を設定し、一日の間に仲間にしてもらって嬉しかったことや感謝したことを発表し合うことで「信頼感」を高めるような手立てをとった。発表するだけでなく、週1回程度、全員が、仲間に感謝したりうれしかったりした内容をカードに書いて掲示し、いつでも見合えるようにした。互いに仲間の書いたカードを見合うことで相互に信頼感を高められるようにした。

イ 異学年交流の取組

異年齢で構成された様々な集団で互いに協力しながら自治的な活動に取り組むことで「自己肯定感」や「相違の受容」、「信頼感」が生まれてくると考えた。下の学年は、上の学年のよさを取り入れることができたり、上の学年は、下の学年に様々なことを伝えることで、特に自己肯定感の高揚につながったりする。こうした活動を通して、子供たちの豊かな仲間意識や、人間関係が築かれていくと考える。

○ ひまわり集会

- ・ 全校を18のグループの縦割り班に編成する。
- ・ 朝の活動（20分間）を使って様々な活動を行う。
- ・ 6年生が主体となり全体で話し合いながら、遊びや活動の計画を立てる。
- ・ 月2～3回の実施



○ みんなともだちレクリエーション

- ・ 集会委員会が計画・運営する。
- ・ 昼休みに行く。
- ・ 低学年の学級と高学年の学級を組み合わせるなど、異学年の学級が触れ合えるように組み分ける。

○ 全校ドッジボール大会

- ・ 体育委員会が計画・運営する。
- ・ 1学期に一回、昼休みに行く。

ウ 人権週間での取組

6月と11月に人権教育を推進する週間を設け、人権に関する知識的側面にも焦点を当てることにした。6月は、学級活動と連携を図りながら、1・2年生は構成的グループエンカウンターを行い、3年生以上は個別の人権課題の理解が図れるようにした。また、11月の人権旬間では、各学年の発達段階に応じた「人権メッセージ」の作成や、「さかせようひまわり集会(人権集会)」を通して、互いの人権を守ることの大切さを自覚できるようにした。



(3) 環境づくりでの取組

ア ひまわりロード(校内設営)や学級設営の取組

校舎1階の廊下を「ひまわりロード」と位置付け、人権に関する設営を行った。特に子供たちがよく通ったり、立ち止まったりする場所に掲示することで日常的に子供たちの目に触れやすいように工夫した。

2 取組が効果を上げた実際の事例

(1) 算数科における事例

ア 人権教育の視点

よりよい表現をする方法を考えたり、視点をもって聞きながら考えをつないだりする言語活動を意図的に設け、共に創り出す喜びを十分に味わわせていく学習活動を展開する。

イ 主な学習の流れ

題材名を知らせずに学習課題を提示し、どうすれば演算決定ができるのかを話し合いながら、既習事項である数直線図や4ます関係図は、分数のわり算の場面にも適用できることを理解した。

ウ 実際の言語活動から

C 1 : 式は $x \times \frac{2}{3} = \frac{4}{9}$ です。4ます表を使えば、式が分かります。ペンキの量が「 $\frac{2}{3}$ 倍」なので、同じように面積も「 $\frac{2}{3}$ 倍」すればよいです。



C 2 : 他にもあります。式は $\frac{4}{9} \div \frac{2}{3}$ です。ペンキの量を1にするには「 $\div \frac{2}{3}$ 」すればよいので、同じように面積も「 $\div \frac{2}{3}$ 」すればよいです。

T : この2つの式にはどんな関係がありますか。

C 1 : $x \times \frac{2}{3} = \frac{4}{9}$ を計算していくと、 $x = \frac{4}{9} \div \frac{2}{3}$ なので、同じ意味だと思います。

C 3 : 他にもあります。ペンキの量を1にするには「 $\frac{3}{2}$ 倍」すればよいので、式は $\frac{4}{9} \times \frac{3}{2}$ でもいいと思います。

C 4 : よく意味が分かりません。

C 3 : ええと、どうしてかと言うと・・・。

T : これまでに学習した言葉を使って説明できませんか。

C 5 : 分かった！代わりに説明します。 $\frac{3}{2}$ は、 $\frac{2}{3}$ の逆数なので、かけたら1になるからこの計算でもいいと思います。

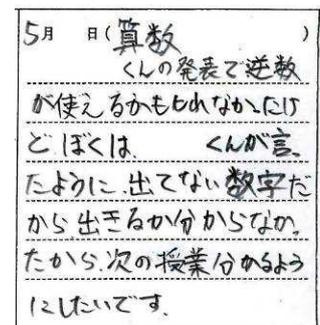
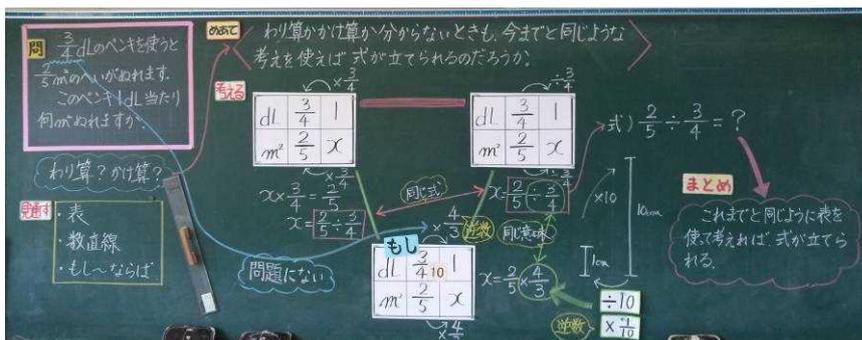
C 4 : ああ、なるほど。わかりました。

C 6 : でも、問題には $\frac{3}{2}$ という数は出てこないで、この式では駄目だと思います。

C 7 : でも、4ます表の書き方は間違っていない。

T : $\frac{4}{9} \times \frac{3}{2}$ と $\frac{4}{9} \div \frac{2}{3}$ の式の関係について、次の時間にも少し詳しく考えてみましょう。では、この問題の式はどれを書けばよいでしょうか。

C 8 : $x \times \frac{2}{3} = \frac{4}{9}$ か $\frac{4}{9} \div \frac{2}{3}$ がいいと思います。 $\frac{3}{2}$ は、問題に出てこないで使えないと思います。



6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びその理由)

- 1 「自分や友達の大切さ」の項目では、特に友達の項目についての伸びが大きく、仲間との関わりを大切にしながら生活しようとする態度が身に付いていると考えられる。
- 2 「人権への理解」の項目については、どの小項目についてもよい結果が見られ、人権に対する理解については十分身に付いていると考えられる。
- 3 「社会的な行動・経験」の項目では、「困ったときに相談できる友達」や、「たとえ友達でも間違っていたら注意できる」と答えた子供の割合が増え、信頼できる仲間がいると自覚している子供が増えていることが分かる。

「話す・聞く・協力する」項目では、「先生や友達の話を聞いて、質問したり、感想を話したりしている」という項目の伸びが大きい。また、「先生や友達の話を聞いて、自分の考えと同じところや違うところを考えながら聞いている」という項目の伸びも大きい。

話の内容を主体的に聞き、比較したり、関係付けたりしながら考えをつなごうとしていることが分かる。

7月 日()	月 日()	月 日()
私は、仲間の考えを、その人の「意図」を考えたから聞きました。なぜなら、意図を考えると次の意見が見つかることが多いためです。次に、自分の考えを、聞いている人が分かるように表現しました。なぜなら相手に伝わらないと何の意味もないと思うからです。最後に自分が成長できたのは、考えられることです。5年生のときはあまり考えようとしていなかったけど、6年生になって、何でも本気で考えるようになりました。2学期もこの調子で元気にがんばってみたいです。		

(現在、実施に当たって課題と感じていること)

- 1 本校では、自己肯定感を高揚させるための手立てを行ってきたが、自分自身に関するよさや積極的な行動を促すことができなかつた。今後は、さらにひまわりノート(自己評価・相互評価)を活用しながら、友達のよさだけでなく自分のよさを自覚させるとともに、教師が積極的に子供たちのよさを子供自身に伝えていく声かけを更に増やすための取組を行っていく必要がある。
- 2 学級経営の充実に向けた取組で、帰りの会等の「今日のありがとう」などの実施で自覚させるように促してきたが、さりげない優しさや気づかいに気付かない子供たちも見られると考えられる。それらの行動を教師が積極的に把握し、一人一人に意図的に伝えていくことも大切である。

さ	せ	私
も	ん	は
あ	。	。
ま	な	自
り	な	分
知	な	の
ら	か	こ
な	な	と
い	が	が
か	考	あ
ら	え	ま
か	た	り
な	と	好
と	思	き
思	い	で
ま	ま	は
し	自	あ
た	分	り
。	の	ま
	良	

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

指宿市立柳田小学校

自分の思いを表現することが苦手、一部の子供だけが活躍し、共に高め合おうとする姿が少ない等の子供の姿と、学校や家庭での実態調査の結果をもとに学校づくりを進めている。このように、子供の現状を明確に把握することは取組をより組織的・効果的なものに行っている。子供たちに対しては「聞く」「話す」「協力する」のスキル表を活用するとともに、教師側も「人権教育を視点にした声かけ、問い返し例」を活用し、子供たちの自己肯定感を高め、問題解決の見通しを導き出そうとしている。「私は仲間の考えをその人の『意図』を考えながら聞きました。なぜなら、『意図』を考えると次の意見につながるからです。次に自分の考えを、聞いている人にわかりやすく表現しました。なぜなら、相手に伝わらないと……」の子供の感想からは、仲間との関わりを大切にする姿を読み取ることができ、取組の成果を丁寧に説明するものとなっている。